様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

# 科学研究費助成事業　　研究成果報告書

令和　３ 年　６ 月 １４ 日現在

機関番号：３７７０１
研究種目：基盤研究(C)（一般）
研究期間：2017～2020
課題番号：１７Ｋ０２７９８

研究課題名（和文）新方言の生成過程にみる方言文法と日本語文法史のインターフェース

研究課題名（英文）The interface of the formational process in neo-dialect and the change in the history of Japanese language

研究代表者
松尾　弘徳（MATSUO, Hironori）

鹿児島国際大学・国際文化学部・准教授

研究者番号：４０４２３５７９

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　1,500,000円

研究成果の概要（和文）：　本研究は、日本語史の知見を生かした新方言の文法研究に取り組むことを企図したものであった。「方言の文法は各地で自由気ままに変化しているわけでは決してなく、一定の方向性が見られる」という見通しのもと、鹿児島県における新方言に関する調査の概略及びその分析結果に関する研究をおこなった。
　その成果として得られた「同意あいづち表現ダカラヨ」「終助詞ダッテ」に関する鹿児島地域の新方言に関する研究は、文法史研究と方言研究のインターフェース（接点）を見出してゆきたい、という当初の目論見をある程度達成できたものと考えられる。

研究成果の学術的意義や社会的意義
　本研究では、鹿児島県における新方言に関する調査の概略及びその分析結果に関する研究をおこなった。研究内容としては「同意あいづち表現ダカラヨ」および「終助詞ダッテ」に関わるもので、これらはいずれも鹿児島地域における新方言とみられるものである。若年層への聞き取り調査から得られたデータに着目することで鹿児島の伝統的方言がどのように変容しつつあるかを成果としてまとめた。
　このような視点からの研究をおこなうことで、方言内部における言語変化の様相が明らかにでき、このことにより日本語方言分野の研究領域に一定の貢献ができたものと考えている。

研究成果の概要（英文）：This study intended to undertake the grammatical research of neo-dialect by utilizing the knowledge of the historical Japanese language. It conducted research on neo-dialect form and the result of the analysis in Kagoshima Prefecture is based on “the dialect grammar has never changed freely in each region, and there is a certain direction.”
The study, which is obtained as a result of “agreement and interjections Dakarayo” and “final particle Datte” about neo-dialect in Kagoshima area, achieved the goal to a certain extent of the initial concept, which uncovered the interface between the Japanese grammatical research and dialect research.

研究分野：日本語学

キーワード：方言文法　新方言　日本語文法史　鹿児島方言

※科研費による研究は、研究者の自覚と責任において実施するものです。そのため、研究の実施や研究成果の公表等については、国の要請等に基づくものではなく、その研究成果に関する見解や責任は、研究者個人に帰属します。

## １．研究開始当初の背景

共通語が日本全国に波及したことで地域間の方言差は縮まりつつある。ところがその一方で、若い世代が新たに使用するようになった、いわゆる「新方言」と呼ばれるものの存在も明らかにされ、各地域における具体例も井上・鑓水(2002)、佐藤(2013)などにまとめられていた。

研究開始当初段階で、申請者は主として近世期筆録の狂言資料を用いて日本語文法史の解明をおこなってきていた（松尾(2008)(2012)など）。そこでは当為表現や因由表現などの文法事項を扱ってきたが、申請者はそれまでの研究成果を踏まえ、日本語史の知見を生かした新方言の文法研究に取り組むことを企図した研究に着手した。

日本語史的観点を踏まえた方言研究としては迫野(2012)、小林(2004)など優れたものがあったが、本研究では、現代日本語研究で議論が活発化しつつあった「とりたて詞」「あいづち表現」などの文法項目について、日本語史観点を踏まえた研究を行うことを目指した。両事項の概要階下のとおり。

(1) とりたて詞とは、「とりたて」の機能を果たす助詞群を指す。現代日本語にはダケ・モ・サエ・コソなどがあり、細かな意味用法の相違に迫る研究も増えつつある。それに対し日本語諸方言に関しては、共通語とは異なるとりたて詞が存するにも関わらず十分な調査がなされていないのが現状である。申請者がこれまで研究を進めてきた福岡新方言のゲナがその好例と言えよう。

(2) あいづち表現とは、会話の相手の発言に対して「うん」「そうだよね」といった反応をする際の表現である。この表現に関しては、鹿児島の新方言ダカラヨが興味深い。ダカラヨがあいづちで使用されることについて、これと同じ用法が東北方言においても存することが報告されている。異なる地域の方言間で同じ方向の変化が生じつつあることについて、その成立過程の考察をおこなうことは、言語変化の方向性を紐解く研究となりうるであろう。

以上のような研究を推進することにより、本研究課題は文法史研究と方言文法研究、および現代語文法研究に大きな貢献をなしうることを大きな目標として設定した。

〈引用文献〉

井上史雄・鑓水兼貴(2002)『辞典　新しい日本語』東洋書林
九州方言学会編(1991)『九州方言の基礎的研究　改訂版』風間書房
小林隆(2004)『方言学的日本語史の方法』ひつじ書房
迫野虔徳(2012)『方言史と日本語史』清文堂
佐藤高司(2013)「新方言の動態 30 年の研究―群馬県方言の社会言語学的研究」ひつじ書房
松尾弘徳(2008)「因由形式の包含関係から見た天理図書館蔵『狂言六義』」『文献探究』46
松尾(2012)「狂言資料に見られる当為表現形式」文法史研究会；於九州大学サテライトオフィス（研究発表）

## ２．研究の目的

本研究が中心に据えたテーマは、日本語文法史の知見を生かした方言文法研究である。申請者はこれまでにも福岡地域を中心とした「新方言」の研究をすすめてきたが、これをいっそう推進し広く九州地域、とりわけ福岡および鹿児島方言に生じている文法変化を明らかにしてゆく必要があるだろう。

方言の文法は各地で自由気ままに変化しているわけでは決してなく、一定の方向性が見られる。方言調査からの実証研究と文法変化に関する理論的研究とを結びつけ、とりたて詞やあいづち表現など、文法項目を中心に九州地域の新方言の研究に取り組む。このように、本課題では言語変化の方向性を考察し、文法史研究と方言研究のインターフェース（接点）を見出してゆきたいと考えた。

## ３．研究の方法

日本語諸方言における文法システムは、地域ごとに異なる可能性があるため、問題とするとりたて詞やあいづち表現などの文法システムが、当該地域でどうなっているのかを明確にさせておく必要があり、アンケートや面接などの方法を用いた方言調査を入念に行うこととした。そのうえで、文献資料から探ることのできる中央語文法体系の変遷との相違点、および共通点を明ら

かにする。このように本研究遂行のためには方言調査・文献調査の両面にわたる丹念なアプローチを要すると考えた。
　方言研究に関しては、主として福岡新方言のとりたて詞ゲナや鹿児島新方言のダカラヨなど、九州地域に見られる新方言の解明を当初の中心課題とした。２年目以降は福岡県以外の地域の九州方言を調査し、新方言として研究を進めるべきそのほかの項目を見出したいと考え、とりわけ申請者の所属大学のある鹿児島県の方言には若年層のみが用いる新方言の存在をいくらか確認できていたため、これらについても詳細な方言調査をおこなって、これまでの報告があまり見られない鹿児島県の新方言に関する研究をすすめてゆきたいと考えた。
　また文献調査に関しては、狂言資料や抄物資料をはじめとする近代語資料（室町～江戸期以降成立の口語資料）から日本語の歴史を探ってゆき、そこから窺える言語変化の方向性を鑑みたうえでの方言文法研究との接点を探ることを試みた。

## ４．研究成果

　本研究の主な成果は下記の２点である。

(1) 鹿児島における新方言ダカラヨ、ダッテの調査
　　研究代表者が研究期間である４年間にわたって所属大学のゼミナールでおこなってきた鹿児島県における新方言に関する調査の概略及びその分析結果について、２回にわたる研究発表をおこなった。
　　研究内容としては、「同意あいづち表現ダカラヨ」および「伝聞を表さないダッテ」に関わるもので、これらはいずれも鹿児島地域における新方言とみられるものである。
　　この内容をまとめた松尾(2020a),松尾(2020b)では、若年層への聞き取り調査から得られたデータに着目することで鹿児島の伝統的方言がどのように変容しつつあるかを述べており、この点において研究課題である「新方言」の文法研究と強く関連する。
　　これらについては次年度以降、学術論文のかたちでまとめることを企図している。

(2) 研究と大学教育とのつながりに関する研究

　　平成２９年９月開催の第６７回西日本国語国文学会において開催されたシンポジウム「学生をそだてる国語国文学の教育」のパネリストとして研究発表をおこなった。
　　シンポジウムの主たる目的は、日本語日本文学という学問領域と教育との接点を探るものであったが、内容の一部には申請者の方言研究の成果をも含むものであった。
　　なお、この内容に関しては松尾(2018)として学術論文化したのであるが、その中では以下のようなことを述べた。
　　① 如何にすれば「小さなことばたち」に対して積極的、自発的に目を向けられる学生をそだてることができるかということに関わる、授業実践例
　　② 「言語感覚を磨き、自身のことば・他者のことばの双方に敏感になることが、己の感性を磨くことや他者への配慮意識の向上に繋がる」ということを日本語学教育の中で伝えるべきであるということ

　上記２点の研究成果については、いずれも本研究課題の中核をなす「九州地域における新方言」の解明につながってゆく。「(1)鹿児島における新方言ダカラヨ、ダッテの調査」については言わずもがなであろうし、「(2) 研究と大学教育とのつながりに関する研究」についても、若い世代に特徴的な新方言を明らかにするために、若い世代が自身の方言に興味を持って分析にあたってもらうことで新方言に関する研究促進も期待できる。
　このような視点からの研究をおこなうことで、本研究では鹿児島県内における言語変化の様相が明らかにでき、このことにより日本語学界の方言研究に寄与できたものと考えている。

〈研究成果〉
上記（1）に関わるもの
松尾弘徳（2020a）「鹿児島新方言としての同意あいづち表現ダカラヨ」第 21 回坂之上言語・文芸研究会
松尾弘徳（2020b）「鹿児島新方言におけるダッテの文法機能」第 283 回筑紫日本語研究会

上記（2）に関わるもの
松尾弘徳（2018）「『小さなことばたち』に目を向けられる学生をそだてるために」『西日本国語国文学』第 5 号（西日本国語国文学会）

５．主な発表論文等

〔雑誌論文〕　計1件（うち査読付論文　1件／うち国際共著　0件／うちオープンアクセス　0件）

| | |
|---|---|
| １．著者名<br>松尾弘徳 | ４．巻<br>第５号 |
| ２．論文標題<br>「小さなことばたち」に目を向けられる学生をそだてるために | ５．発行年<br>2018年 |
| ３．雑誌名<br>西日本国語国文学 | ６．最初と最後の頁<br>52-61 |
| 掲載論文のDOI（デジタルオブジェクト識別子）<br>なし | 査読の有無<br>有 |
| オープンアクセス<br>オープンアクセスではない、又はオープンアクセスが困難 | 国際共著<br>－ |

〔学会発表〕　計6件（うち招待講演　1件／うち国際学会　0件）

| |
|---|
| １．発表者名<br>松尾弘徳 |
| ２．発表標題<br>鹿児島新方言におけるダッテの文法機能 |
| ３．学会等名<br>第283回筑紫日本語研究会 |
| ４．発表年<br>2020年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>松尾弘徳 |
| ２．発表標題<br>鹿児島新方言としての同意あいづち表現ダカラヨ |
| ３．学会等名<br>第21回坂之上言語・文芸研究会 |
| ４．発表年<br>2020年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>松尾弘徳 |
| ２．発表標題<br>謎解きイベントと日本語学の親和性について |
| ３．学会等名<br>第14回坂之上言語・文芸研究会 |
| ４．発表年<br>2018年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>松尾弘徳 |
| ２．発表標題<br>「小さなことばたち」に目を向けるための日本語学 |
| ３．学会等名<br>第12回坂之上言語・文芸研究会，平成２９年４月２３日，於鹿児島国際大学 |
| ４．発表年<br>2017年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>松尾弘徳 |
| ２．発表標題<br>「小さなことばたち」に目を向けられる学生をそだてるために |
| ３．学会等名<br>第67回西日本国語国文学会シンポジウム「学生をそだてる国語国文学の教育」報告２,平成２９年９月９日,於九州大学 |
| ４．発表年<br>2017年 |

| |
|---|
| １．発表者名<br>松尾弘徳・久保薗愛 |
| ２．発表標題<br>薩摩の少年ゴンザ１１歳から２１歳の軌跡 |
| ３．学会等名<br>第2回かごしま弁フェスティバル,平成２９年１２月１６日,於かごしま県民交流センター（招待講演） |
| ４．発表年<br>2017年 |

〔図書〕　計0件

〔産業財産権〕

〔その他〕

－

６．研究組織

| | 氏名<br>（ローマ字氏名）<br>（研究者番号） | 所属研究機関・部局・職<br>（機関番号） | 備考 |
|---|---|---|---|

７．科研費を使用して開催した国際研究集会

〔国際研究集会〕　計0件

８．本研究に関連して実施した国際共同研究の実施状況

| 共同研究相手国 | 相手方研究機関 |
| --- | --- |